織斑一夏は眠りたいけど寝かせてくれない人がいる

ノウレヅジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑一夏は眠りたいけど寝かせてくれない人がいる

【Nコード】

N9435X

【作者名】

ノウレッジ

【あらすじ】

IS学園にて、一夏の調子が最近悪いようだ。見かねた5人のヒロインズは早朝、彼の部屋へと向かうが……。

インフィニット・ストラトスものです。

(前書き)

ノウレッジです。

野暮な事は言いつつ無しで。

それでは、スタートです！

IS学園の朝の廊下、スズメが鳴きあちこちの部屋で早めの目覚まし時計が鳴る頃、目的地を同じとした5人の少女がバツタリと廊下で出くわした。

1人目は黒髪にポニーテールの剣道少女、篠ノ之箒。古風な喋り方をし、向かう先の部屋にいる人物の幼馴染だ。

俗に言う「ツンデレ」であり、IS開発者の妹でもある。

2人目はブロンドのロングでイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。レーザーやライフルを始めとする銃撃を得意とする貴族。プライドが高く、それ故に誇り高き精神を持つお嬢様。

3人目はサイドアップテールで中国代表候補生、鳳鈴音^{ファンゼンイン}。箒と時期を異にする幼馴染で活発的な少女。

陽気な性格であると同時に強い心を持ち、沈んだ人を叱咤するアネゴ肌でもある。

4人目は長い銀髪に左目に眼帯をしたドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。間違った知識から部屋の主を「嫁」と呼ぶ。

ドイツ軍最強の部隊『黒ウサギ隊^{シュバルツェ・ハーゼ}』の年若き隊長であり、複雑な生い立ちを持つ。

5人目は金髪を背中括ったフランス代表候補生、シャルロット・デユノア。ボーイツシュな少女であり一時期は男装していた事も。

生まれには触れられたくないが、それで部屋の持ち主に出会えた事は嬉しかったりする。

「……これは全員同じ目的と見て良いのか？」

最初5人は沈黙を貫いていたが、最初に徐に口を開いたのは篤だ。それを皮切りに他の4人も口を開く。

「まさか、同じ日に思い立つとは思いませんでしたわ」

困惑気味に言うセシリア。

「あれか、考える事は皆同じってヤツ？」

自嘲を含める鈴音こと通称鈴。

「うーん、これで本人が気付かないんだから話が余計ややこしくなるんだよね」

苦笑いを浮かべるシャルロットこと通称シャル。

「こつというのは伴侶の役割ではないのか？」

若干疎ましげな視線を混ぜるラウラ。

5人は同時に肩を竦ませ、同時に溜息を吐いた。

そう、自分達がこんなに苦労しているというのに、あいつは全く気付かない。鈍感過ぎて嫌になるくらいだ。

それでも、自分達はいいつに惚れてしまったんだから仕方がない。惚れた弱みだ。

実際、押し倒されでもしたら流れに逆らう事はきつとできない。

心の中のあいつの存在はそこまで大きいからだ。

はぁ、ともう一度溜息を吐く。どうせここで争ったって無意味だ。一人で起こしに行く機会は今後もあるだろうし、今日は皆で起こしに行こう。恋よりも友情を取る事だって大切なからだ。

世界最強兵器ISは女性にしか扱えない。しかし、唯一使える男性がいる。それが5人が向かう部屋の主、織斑おりむらいちか一夏いちかだ。

初代IS大会の優勝者でありこの学園の教師でもある千冬ちふゆを姉に持ち、唐変木オブ唐変木ズの異名を持つ鈍感さだ。

女性には非常に優しく、それ故か女性絡みのトラブルも多い。その事を暗に示しても全く気付かないのが困りものであり、それで八つ当たり（正当な制裁もあるが）をしても絶対にこちらを非難せずまた優しく接してくれるのだから尚困りものだ。

……もつとも、そこにも惚れたのだからどうしようも無いが。というか、それが無くなったらきつと彼との縁は切れてしまうだろう。

一つの扉の前、表札にある「織斑」の字を確認すると、5人は一斉に戸を叩いた。大きな音が周囲に響く。

(ば、バカ！ 5人1度に叩く奴がいるか！ 近所迷惑だろ！)

(でしたらわたくし以外はご遠慮くださいな！ 一夏さんの爽やかな目覚めが台無しになってしまいますわ！)

(そういうアンタこそ引っこんでなさいよ！ こういうのは気の置けない関係がやるモンでしょ！)

(まあまあ、過ぎた事をどうこう言っても仕方がないよ。だからここは僕が代表して……)

(シャルロット、抜け駆けだぞそれは。私にやらせろ！)

小声で怒鳴るといふ器用な事をしながら5人はドアの前を堂々と占拠する。

が、途中で気付いた。部屋の中が妙に静かだ。周囲の人達は今の音に気付いて顔を覗かせたりしているのに、当の部屋の主がこうも無反応というのはおかしい。

部屋の中に誰かがいたという事は今まで多々あったが、ここまで無言というのは彼の律義かつお人好し乙女心ブレイカー(一部『女誑し』とも呼ばれる。全員が肯定したのは言うまでも無い)な性格にしては奇妙極まりない。

「可能性は2つ」

「まだ眠っていらっしやるか……」

「何か起きたか」

「何にせよ、部屋に入る口実としては十分だね」

「入るぞ。有事でもまだ間に合うかも知れん」

幕の脳裏に、夏の『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』戦で自分を庇って瀕死の重傷を負

つた一夏の姿がフラツシユバツクする。己の未熟さが招いた悲劇だったと、腰の真剣を抜刀できるように構える。

セシリアの脳裏に、自分を丹念にマツサージしてくれた一夏の姿が浮かぶ。もしかしたらもうあの耽美な時間は味わえないかも知れないと思うと、寒気が走る。

鈴の脳裏に、ニコニコ笑って楽しく過ごした一夏との中学時代が思い出された。ライバルもいなく、思えばあの頃に決めればもっと楽だったのかも知れないと苦笑いする。

ラウラの脳裏に、千冬とよく似た人物に銃で狙われた一夏の姿があった。もしも自分が彼の後をつけなかったら彼は死んでいたかも知れないと考えると、ゾツとする。

シャルの脳裏に、自分の真実を知ってなお優しく接してくれた一夏の姿が現れた。彼が自分の事を押し留めてくれなかったら、こんな楽しい時間はもう一生無かつただろう。

「ISの展開を準備しましょう。何が起こるか分かりませんわ」
「一応部屋の中から『白式』の反応はあるよ。でも、コアだけ剥がされたって可能性も考えるべきだよね」

キユイイイン、と持ち主にしか聞こえない程の微かな音でISが起動を始める。

5人は顔を見合わせると、一斉にドアを開けた。

「「「「「一夏(さん)！」「「「「「」

バン！ と派手な音を立てて中に全員が飛び込む。するとそこに
は……

「何やってんですか！」

「んーと、モーニングコール？」

怒鳴る筈にテキトーに答える楯無。この柳のような人物には怒気は通じないと分かっているも怒らずにはいられない。

すぐに埒が明かなくなるタイプだと理解した5人は力尽くで楯無を引っぺがしにかかった。ISを無断で起動するところからともなく千冬が飛んで来て厳罰を与えるという事を悟っているのだ。

「てやあ！」

が、気合い一閃、では無く気怠げ一閃、5人は一斉に楯無の投げ技でポポポーン、と放り投げられた。それでも一夏には十分だったらしく、命辛々といった様子で布団の下から抜け出した。体勢が変化したお陰で拘束が解けたようだ。

「アデッ！」

もつとも、焦り過ぎてベッドから首から落ちてしまったのだが。グキ、と嫌な音がして首が曲がる。そしてその一瞬の隙を狙って楯無が再びイタズラ目的で手を伸ばして来た。

これを勘で察知した一夏は全身全霊で回避行動を取る。がむしゃらに足を動かしてベッドを蹴り飛ばすと、反動で前転の要領で立ち上がり、一気に後ろへ跳ぶ。

「おー、80ラウンドもやった後なのによく動けるね」

「」「」「ラウンド！？」「」「」

5人の顔が一瞬で真っ赤に染まる。

「一夏！ いったいどういっ……」
「フニャ……」

鈴がそれを咎めようと詰め寄るが、一夏は奇妙な声を出した後パタリ、と近くにいた篝の胸元に倒れこんだ。

「！？」

「い、一夏……？」

「篝さん、どういっ事です！？」

「どういっもこういっも……、ええいふざけてるのか、一夏……」
「ぐう……」

いちか は ねむっている。

ほつき は いちか を おこそうと した。

いちか は ねむっている。

『……、ご説明を生徒会長？』

「やは……。バイバイ！」

攻撃の対象が自分に向いたのが分かると、ビュン！ と目にも止まらぬ速さで駆け出して部屋を後にする楯無。

一方で一夏は幸せそうな顔で眠っていた。

「叩き起こして問い詰めたいけど……」

「こつも幸せそうに寝ている奴を起こすのは気が引ける」

「あれ、クマができてる」

グッスリと赤子のように安眠の眠りを手に入れた一夏の目元には深いクマがあった。

「そうだったな。一夏が最近寝不足に見えたから皆でこうして心配して来たんだったな」

「あの生徒会長が何か囁んでいると見て間違いなさそうですね」

「それは多分これだよ」

シャルがテレビに接続されたゲーム機を指差す。セットされているソフトは格ゲーだった。

「ラウンドってこれだったんだね」

「はは、ははは……」

「わ、わたくしは最初から分かってましたわ……！」

「ウソつけ」

夕食を取るために食堂で話し合う、一夏を交えた5人。

「じゃあ、この一週間、毎晩来てるの？」

「で、徹夜でゲームしてた、と」

「ああ。一晩だけ来なかった日があったが……。あれが無かったら……ぐう、ってあづああああああああっ！」

「落ち着け、バカ者」

まだ寝不足なのか、休み時間目一杯寝たが（マジメなので授業中は寝ないように必死だった）いきなり意識が飛び、温かいご飯の中に顔を突っ込んでしまった。

顔についた米粒を眠気と闘いながら取っている一夏を一旦ほっておき、女子5人はヒソヒソと相談を始めた。

（どうする。このままじゃ生活に支障が出るぞ）

（もう出ているとは思いますが……）

（でもまあ見てらんないね。織斑先生の授業で寝たらこいつのダメージ増えるだろうし）

（徹夜続きってのは体に毒だよ。なんとかして休ませてあげたいな）

(それにしてもあの生徒会長はどうやって休息を取っているんだ…?)

「ぐう……………」

お茶を飲むために手を伸ばした姿勢で一夏が眠っているのに気が付いたのはそれから一分後の話。

「悪いな、皆。わざわざ付き合ってもらって」

シヨボシヨボとする目を擦りながら、俺は一緒に歩く皆に言った。

「今のお前はいくらなんでも見ていられんからな」

篝の苦笑いが優しさだと解らない程、俺とてバカではない。他の4人も苦笑いをしたり肩を竦ませたりと、気遣っているのが分かる。

「まあ、まだ楯無さんも来てないと思うし、お茶ぐらい淹れるよ」

そう言っただけはドアに手をかけた。少なくともそのくらいの余裕はあるし、ここまで気遣ってもらっているんだから、ちょっとくらいお返しがしたい。楯無さんが来るのは大体二時間ぐらい後だからな。

ガチャ。

「お帰りなさい。ごは」

ボタン。

「……………」

「表札は……、あっているな」

同情なのか怒りなのかそれともその緋い交ぜなのかもつと別の物なのかは分からないが、とにかく視線が背中に刺さる。数はもちろん5つ。

意を決してもう一度ドアを開ける。

ガチャ。

「お帰りなさい。ご飯にします？ お風呂にします？ それともわた・し？」

ボタン。

「……………」

「寝不足がとうとう幻覚を見せ始めたか……………」

視線の意味がさっきよりも複雑かつ強力になって背中に突き刺さ

った。

ゴシゴシと目を擦る。同じような光景が前にもあった気がする。具体的には楯無さんの結構際どい水着とエプロン姿。

さて、今度はちゃんと入ろう。お客さんをいつまでも待たせるのは失礼だ。

ガチャ。

「お帰りなさい。私にします？ 私にします？ それともわ・た・し？」

「チクシヨウ、夢でも幻覚でも無い！ そして前にも言ったが選択肢が無い！」

「あら、あるじゃない。一択なだけで」

「一択を選択肢と呼べますかねえ！？」

「じゃあこう言い換えましょう。私とベッドインします？ 18禁な事します？ それとも私を食べちゃいます？」

「だあああつ！ 言い換えれば良いってモンじゃないですよ！ つか結局全部同じ！？ 三択に見せかけた一択とか夕チが悪すぎる！」

「大丈夫！ 痛いのは女である私だけだから！」

「問題点が違います！ つか俺みたいなのヤツを最初の相手にしないで下さい！ 貴方にはもっと相応しい奴がいると思います！」

「その名は織斑一夏！」

「そうそ……、って違います！ 俺以外にです！」

「ぜえぜえ……。いかん、体力がただでさえ少ないのに大声で叫んだから余計疲れた。」

「一夏、取り敢えず部屋の中に入れてくれるか？ 廊下で立ち話をするのも何だしな」

「おお……」

廊下で立ち話の方がまだマシなのかも知れないと思ったがな。

「で、今度は何です？ 間違っただのトコに爆弾でも届くんですか？」

「んもう、イケズねえ。据え膳食わぬは男の恥って言うわよ？」

「好色野郎じゃないんですから……。第一、見境無く誰彼食ったらこのご時世一発で死刑モンです」

死刑は無いだろうが、終身刑はありそうだ。いや、この女尊男卑の世界じゃ有り得るな、死刑も。リンチされて死んでもお咎め無しになりそうだ。

私刑で死刑。なんつって。

ゴスツ！ あで！

「り、鈴……、何を……！」

「私刑」

ぐあ、バレてる。

でもま、それは置いてモルパンダイブしたところでフルボッコにされて終わりそうだ。この人強いし。

「で、何の用だったんです、この一週間？」

「えへへ、実は……、コレ！」

楯無さんが取り出したるは1枚のポスター。

「『来たれ、最強の格ゲーマー』？」

ポスターによると本日の午後5時、市内で格ゲー大会があったらしい。

「そ。格ゲーあんまやった事無くってさ。虚まじや本音ほんねも経験殆ど無いから頼み辛いし」

「で、俺に白羽の矢が立ったと？」

「そう！ お陰で優勝できたよ、ありがとう！ 優勝賞品の商品券

か賞金でエロ下着買ってキミに今度見せたげる！」

「エロ！？ いえ結構であります！」

「一夏さん、口調が変わってますわ」

「一夏のえっち……！」

うあ、シャルのあのセリフを非難100%で聞く事になるとは…

…！

「まあ、一夏もまた男だったという事だ」

「そうでなきゃ、我々はここで出会っていなかったただろうからな」

「箒、ラウラ……」

おお、普段なら全員が俺に集中砲火して来るのに味方が今回は

「だが喰らつとけ」

「それとこれとは話が違うからな」

「えぐばっ！」

いなかったか……、ガクッ。

「まったく。少しは自重したらどうだ。そんな腑抜けた態度だからいつまでも腕が上がらないのだ」

「お前というヤツは嫁失格も良いところだ。浮気が甲斐性だとは聞いた事があるが、された方にしてみれば堪った物では無いぞ」

床にバタリと倒れた一夏に小言をくれてやる筈とラウラ。
だが、一夏から反応は無い。

「「一夏？」」

白目を剥いて一夏は気絶していた。

いちか は きぜつ している。

サア、と顔が青くなる筈とラウラ。

そうだ、一夏は寝不足が重なっていたのだ。

軍事訓練を受けたセシリア、鈴、シャルロットや、軍隊式の拷問訓練を受けたラウラとは違い一般男子なのだ。

いや自分も一般の範囲内なのだがそれは取り敢えず置いておく。

「す、スマン一夏！ やり過ぎた！」

「いいからベッドに運ぶぞ！」

「……、そう言えばここ一週間殆ど寝てないんだっけ」

「あー、若しかしなくても私の所為？ ごめんね」

取り敢えずバタバタと一夏の看病をしようとして右往左往し、結局ラウラの案で彼の姉の千冬に頼る事になったのはそれから7分後の話である。

もう少し冷静になるべきだったと皆が反省したのはまた後日の話。

「まったく、何をしているのだお前達は。応急手当の方法ぐらい熟知しているだろうに」

まあ寝不足のヤツにする処置は無いだろうが、と千冬が独りごちる。

しょんぼりしている6人にはそれでも効果覿面なのだが。

「この年になって私になお手をかけさせるとはな。こいつもまだまだ成長していない」

ピシッ、と額を指で弾く。皆から事情を聞いて一夏の状態を知っているので、今回は軽めの一撃だ。

「むー、結果報告したかったけど……。また今度ね」

「その時はキチンと就寝時刻その他を守れよ。次やったら反省文だけじゃ済まさん」

「というか丸々一晩ゲーム続きを何日もやっていてなおこの元気って……」

「どんだけハイスペックなのよ、この人は……」

反省しているように見えない（本人は多分している）楯無に千冬が太い釘を刺す。その横でシャルと鈴が呆れかえる。

「ぐう……。千冬姉……」

ベッドの中で眠っている一夏が寝言で千冬の名を呼んだ。ん？と振り返ると、一夏は寝言で何かを喋り始めた。

「ここに夏用のスーツかけておくよ……」

どうやら家で彼女のスーツをハンガーにかけるシーンらしい。

「そう言えばレム睡眠の人間の寝言で会話が成立するという話を聞いた事がありますわ」

「そうか。ならば試してみよう」

セシリアの言葉に千冬が面白そうに顔を歪めた。

「分かった。このナース服は仕舞っておこう」

『!?!?』

「うん、バーン服もね……」

『!?!?!?』

皆は千冬の悪戯というか返しの内容に驚き、続いて発せられた一夏の寝言の内容に更に驚いた。寝言で会話できているという事実への関心が無くなるくらいだ。

「こいつの夢の中で、私は何をやってるんだろうな」

ククク、と楽しそうに千冬が笑う。

「ぐう……、筈い……」

「！」

名前を呼ばれて思わず体が反応する筈。ビクッ！ と飛び跳ねたかと思うくらいの動揺は普段の彼女を見ている者にとっては新鮮だ。

「大体6秒くらいの夢をレム睡眠の間に何回も連続して見てるらしいよ」

「じゃあ、夢の中身が変わったのか……？」

シャルの言葉に筈が恐る恐る一夏に一步寄る。若しかしたら彼と普段できないような会話ができるかも知れない。

「どうしてなんだ、筈……。俺何も悪くないじゃんか……」

「そ、そうか？」

何やら夢の中で一夏は筈を怒らせたようだ。

「だからこの磔を解いて俺を真剣の試し切りにするのは止めてくれ
……」

「明らかに殺しにかかっている!？」

彼は何をやったのだろうか。

よく見ると顔が若干青ざめている。まあ殺されかかっているのだ、良い夢心地では無いだろう。

安易に真剣を抜刀するのは今後控えようと思う筈だった。

「ぐむ……、セシリア……」

「今度はわたくしですね」

血色は元に戻り、夢も変わったようだ。

生唾を飲んで事態に備える。何が彼の夢の中で起こっているのか、それは彼自身でしか分からないのだ。

「クッキーを焼いてくれるのはすごく嬉しいよ……」

「それは何よりです」

ルン とセシリアの顔が上機嫌になり、すぐに元に戻った。「焼いてくれる“のは”嬉しい」と彼は言った。何かマイナスの事が同時に起こっているのだろうか。

「でも何で材料に刻んだ網タイツを使おうとするんだ……」
「不名誉極まり無いですわ!？」

ガーン! とセシリアは多大なショックを受けた。いくら何でも網タイツを食材として扱わない事ぐらい彼女とて分かっている。

「一夏さんの中のわたくしの人物像の一部が分かった気がします」
「そ、そっか……」

怒りと悲しみで涙目になっているセシリアは部屋の隅の方で沈んでしまった。

ここで元気づけたくなくなるのが鈴の性分なのだが、奈何せん事実過ぎてかける言葉が無い。

「鈴……」
「あたしか……」

またもや夢が切り替わる。

サイドアップテールを揺らして一夏に近寄る鈴。これまでの事からして彼の見ている夢は現実と虚構が半分くらい混ざっている。覚悟しないと乙女心も彼への人間像も木端微塵になりかねない。

「ど、どっからでも来い……！」

仮にも中国代表候補生。無様に負けるつもりは無い。

「弁当作ってくれたのは嬉しいよ……、屋上つても良い……」
「で、でしょでしょ!? さっすがあたし!」

シーンは屋上、二人きりでのお弁当タイムのようだ。

「でも何でお前の酢豚は暖かくてこっちは凍ってるんだ……」
「アンタあたしを何だと思ってるわけ!？」

構えていたのにやられた。上げて落とすとは中々やる男だと千冬が関心している。

屋上で冷えた酢豚をあげた事を根に持っていたのかも知れない。

「くうう、見てなさいよ……！ 今度目に物見せてやるんだから……！」

ギリギリと歯を軋ませる鈴。今度は冷たくても美味しい物にするべきか、いやそれでは『暖かいのがいい』『しょーがないわね』『はいあーん』の図ができなくなってしまう。
専用機持ちもこういった色恋沙汰においては年相応のようだ。

「ラウラ……」

「……………」

更に呼ばれたラウラ。一夏の表情が悪くなったのを見ると、どうやら悪夢のようだ。

静かに手を握る。これで少しは楽になればと思つての行動だ。

「違う、日本にそんな習慣はないんだ……………」

「ぬ、クラリツサはこういふものだと言つていたが…………？」

ちなみにクラリツサというのは彼女の部隊の副隊長であり、隊員達からは『お姉様』と呼ばれていたりする。

一夏が何の夢を見ているか分からない以上、こうしてクラリツサの所為にしておいた方が良さそうだ。クラリツサに心の中で謝りながら一夏の続く言葉を聞く。

「嫁の皮膚剥いても豊作にはならない……」
「いくら何でも私をバカにし過ぎだ！」

確かに日本の文化には疎いところがあるが、豊作祈願に逐一生皮をひん剥いていたら相手は死んでしまうだろう。そのくらい分かるしクラリツサだってそれが不自然だと分からない程日本について無知では無い。

「今度日本の作法についての本を買おうか……」

ムスツ、と不貞腐れてしまうラウラ。

あはは、と乾いた笑いしか漏らせないシャルは、内心ビクビクしていた。一夏争奪戦のメンバーは彼女以外全員出た。妙な夢で妙な役割をやらされるのもゴメンだが、出て来ないのもそれはそれでま

た問題だ。

「シャルウ……………」

「あ、何かな？」

自分もちゃんと出て来た事に安堵する。

果たして自分はどんな奇妙奇天烈な役割なのか、興味はある。ここまで役割はもうメチャクチャでありながらも本人の人物像の一部をすっかりなぞっている。一概に否定しきれないのが悔しいところだ。

「本当にごめんなさい……………、俺が悪かったよお……………」

「ふふ、そこまで言うなら許してあげよっかな」

一夏が謝るシーンだ。シャルを怒らせてしまったのだろうか、一夏の寝言には必死さが見え隠れしている。

シャルが許した事が聞こえたのか、一夏の表情は安らかなものになった。

「股間に向けて銃弾バラ撒くのはもう勘弁してくれよ……」
「夢の中の僕は何色んな未来奪おうとしてるのかな!？」

「どんだけキレたんだ、とシャルは頭を抱えた。

「急所には痛覚神経が密集している。そんなところに銃弾を撃ち込めば発生する痛みは想像を絶する。」

「というかそんな事したら子供もできない。考えなしに怒る事は考えものだと思った。」

「その後も次々と色んな人が夢の中に登場した。」

「楯無さん、それはオムツです……」

「私は何をオムツと間違えたんだろうね……」

「蘭……」

「誰?」「中学時代のこいつの親友の妹」「ああ、あいつか」

「いくらアホだからって弾をゴミ袋に入れて捨てるなよ……」

「アグレッツシブ……」「この間のアレを見る限り、私達と同類だつて事なら分かるけど」

「のほほんさん……」

「お、本音だ」

「サンマにマスタードと生卵とトウバンジャンをかけないで下さい、食欲が……」

「あの子何やってんの……」「聞いただけで吐きそうだ」

「東さん……」

「篠ノ之博士だ」「……」

「実験の名称でカビ生えたパンを食べさせようとししないで下さい……」

「人物像がよく分かるな」「あー」

「だ、弾……、それ食べちゃダメだ……」

「蘭さんのお兄さんですか?」「そ」

「ああ言わんこつちやない、尻から芽が……!」

「何を食べたんですの!?!」「アホに拍車がかかったか……」「この発想力が怖い……」

ぐう、と再び沈黙。終わったか? と皆が思った時、一夏の寝言が再び紡がれた。

「皆、おいてかないでえ……」

おいてけぼりを喰らったらしい。泣いている。

「こんな怪物、一人でどうしろってんだよ……」

しかも戦場で。

「そんな薄情な女じゃないよ」

「私は見捨てたりはしないぞ?」

「落ち着くんだ、冷静になれ一夏」

「オルコット家の名において見捨てたりはしませんわ」

「アンタをおいて逃げるような状況なんて有り得ないわよ」

「泣くな、それでも私の嫁か」

「大丈夫、皆いるよ一夏」

しかし、今度は届かなかっただけで、一人である事を前提にした寝言が続く。

「こんなの一人でなんて、うあ、ヤカンがあ……。ここでスプーンはねえよお……………」

『?』

「ちょ、そこでハットトリックって……。ここはバリカンだろお…

…」

『???』

「うわあ……………！ ビスケットが、飛んで、跳ねて、回って、捻じれてえ……………」

『???』

「眼鏡が、眼鏡があ……………、溺れるう……………!!」

『???』

あまりにも脈絡のない単語が次々と登場する。どうやら怪物の恐ろしさは強さではなくこの不可解さにあるようだ。

「か……………」

『か?』

「カレーライスの複雑骨折……………」

『?????』

最早何かの暗号ではないかと思われ程、意味不明の言葉が飛び出したのを最後に一夏は沈黙し、安定した寝息を立て始めた。レム睡眠が終わったらしい。

「結局何だったの…………?」

「さあ……………」

後日、本人に夢の内容を聞いても全く覚えていなかったそうで、この言葉達の正体は一切が闇の中なのである。

おしまい

おまけ

「これで一件落着です」

誰もいない廊下で楯無が呟く。携帯の通話先は事実上の学園長だ。

『毎度世話をかけますね』

「いえいえ、当然の事です。というか今回は一夏くんに言って下さい」

ここ一週間は徹夜だったみたいなんで。楯無はそう続けた。手にした商品券と賞金の入った袋の中には手錠も入っている。

『それでは、引き続きお願いします』

「お任せ下さい。二時間で終わらせます」

どうやら格ゲー大会の裏で何かが動いていたのを察知したらしく、

彼女が駆り出されたようだった。

今度彼には何かお礼をしなくちゃ。若干の期待のような感情を込めて、楯無は学園の外にあるターゲットがアジトにしている空き倉庫へと向かうのであった。

おわり

(後書き)

というワケで如何でしたか？

ちなみに千冬が楯無に強く言わないのは、彼女が何の目的で一夏の部屋にいたかを知っていたからです。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9435x/>

織斑一夏は眠りたいけど寝かせてくれない人がいる

2011年10月26日13時00分発行